

陳舜臣さんを語る会通信

NO.5 May 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年5月1日

舞子浜の呉邸を舞台に呉錦堂・孫文が登場する陳舜臣『囚人の斧』

移情閣が描かれたり、呉錦堂が登場する文学作品としては、獅子文六『バナナ』や村松梢風『近世名勝負物語』『黄金街の覇者』などが知られています。本号では、陳舜臣『異郷の檻のなか』（中央公論社 1971年）収録の中篇、「囚人の斧」（初出は「オール読物」1969年6月号）をみていきます。（編集委員 橘雄三）

《1. はじめに》

陳舜臣著『異郷の檻のなか』は、すべて中国および中国人に、なんらかの意味で関係のある作品、百枚前後の中篇小説を四篇あつめた作品集です。

同書の「あとがき」に陳舜臣さんは次のように書いています。

「なお本書に収録した作品のなかには、事実ヒントを得て書かれたものもあるが、モデルというほどには密着していない。本筋において、フィクションである。モデルに対する興味で読まれるのは、作者の本意とするところではない」

この点に関してはあとで、もう一度ふれます。

《2. 舞台及び登場人物》

ここに、よく知られた一枚の写真があります。

1913年3月14日、舞子の自らの別荘前、居並ぶ神戸華僑、財界名士のなか、前列中央、孫文の横に誇らしげな呉錦堂が写っております。「囚人の斧」は、この写真の裏にあった一つの出来事を描いています。裏にあった出来事、それはフィクションですが。

ハイライトの舞台は、呉錦堂の舞子の宏壮な邸と松林などその周辺です。

次は、主たる登場人物です。

まずは、実在の人物。

呉錦堂：鐘紡株をめぐっての「鈴久事件」から始まり、故郷慈谿での治水事業・学校設立、小東野開拓事業、そして、物語のハイライト、舞子の邸での孫文歓迎宴などが、中篇小説ながら、相当なページを割いて語られています。

孫文：孫文の呉邸訪問へ至るプロセス・時代背景として、中国広東省惠州での「革命軍挙兵」、安徽省での徐錫麟の「暴動」失敗、浙江省での女革命家秋瑾の処刑、辛亥革命勃発、孫文臨時大總統就任、中

華民国樹立、袁世凱臨時大總統就任、孫文全国鐵路督弁就任などについての記述があります。

このような呉錦堂の事蹟、並びに中国革命を中心とした時代背景が語られる合間に、架空の人物として、呉錦堂に日本への留学機会を与えられた青年、呉育雲と曹永忠、そしてこの二人と、呉邸に住む若い女性菊代との絡みが割って入り筋が進みます。

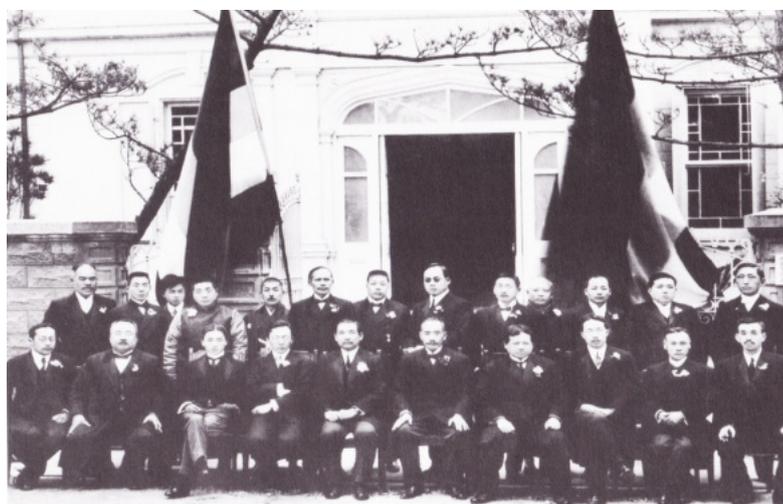
架空の人物3人を説明します。

呉育雲：主人公の青年。呉錦堂にその才を認められ、土木工学を学ぶため日本へ留学。しかしそのことが呉錦堂に対する負い目、心の負担となり悩む。東京での留学を終え、舞子の呉邸に住む。菊代と男女の関係になる。

曹永忠：呉錦堂にその才を認められ、法律を学ぶため日本へ留学。一旦、中国に帰り、呉錦堂の中国での事業を手伝っていたが日本へ戻り、呉邸に住む。菊代に気がある。金(カネ)のため、袁世凱の手先となり孫文暗殺を計画。

菊代：呉邸に住む。呉錦堂と関係のあった芸者の縁続きの娘。呉育雲に積極的に近づく。

次頁では、どうして「囚人の斧」というような不思議な題名が付いたのかをみていきます。



『孫文先生東游紀念写真帖』より

『囚人の斧』 題名を考える

《3. 「囚人の斧」 題名を考える》

呉錦堂の故郷、浙江省慈谿県はつねに水害に悩まされ、郷土の治水が彼の悲願であった。呉錦堂は、治水計画を具体化するために、島総彦という日本人技師を招聘するとともに、「神童」の誉れ高い郷土の少年、呉育雲を土木技師に育てようとしてきました。

作品から抜粋引用します。

呉育雲はいま悩んでいる。少年時代の呉錦堂がもったかもしれない悩みとは、まるで異質のものであるはずだった。村を出た呉錦堂は、すくなくとも自分の意思で将来の道をえらぶことができた。いまの呉育雲にはそれができない。後援者は特殊な目的をもって、学資を出していたのである。

土木技師。どうしても自分の性格に合いそうもない。だが、彼の前途はそうきめられていた。(牢獄にいれられたようだ)

囚人として生きねばならない。(中略)

好きな学問をすることができたら、どんなにいいだろう。…彼はそう思った。(中略)

囚人には自由がない。土木技師になる以外のことを、彼は自分で想像したことさえなかった。ふいに哀しくなった。

次は「斧」の意味です。

呉育雲は、東京での四年間の留学が終わると、神戸に呼ばれます。呉錦堂は彼を郷里の治水工事要員として学問させたのですが、郷里に帰す前に、その時期、始めていた、現在の神戸市西区神出町小東野の開拓事業の手伝いを命じます。呉育雲は舞子の呉邸に住み込み、毎日、小東野へ通います。

引用します。

小東野では、毎日、斧と鋸の音がして、ときどき伐られた松の巨木の倒れる音がまじった。近所に製材所がつくられ、(中略)

呉錦堂は小野田セメントと尼崎セメントの大株主であった。小東野の松の木は、製材所でセメント用の樽につくられてセメント会社に送りこまれていたのである。

(中略。次の行、「彼」は呉育雲を指します)

翌朝、彼は起き抜けに小東野へ行き、労務者のバラックから斧を持ち出した。

そのあたりで一ばんふとい松の幹めがけて、彼は力まかせにその斧を振りおろした。

がッ！と斧が幹に食いこみ、その手ごたえは、腹の底まで響きを伝えた。彼はそれをくり返した。



振り下ろす斧の先に、呉育雲は何を見ていたのでしょうか？松の幹か、それとも、自身の境遇か？

貧農の出ながら、日本へ渡り、才覚と行動力で、一代で財をなした有名人呉錦堂に見込まれ、日本留学という、一見、夢のような道を進んでいる呉育雲。

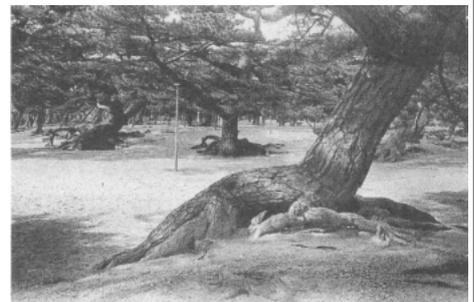
ところが、呉育雲はこのような境遇を「(牢獄にいれられたようだ) 囚人として生きねばならない」と思い詰める。

更に、呉育雲の心境は次のように描かれます。「すべてを見とおす眼さえそなわっておれば、まだ呉錦堂に対抗できるのである」「つねに彼の前に立ちまわっていた呉錦堂を克服して、はじめて彼はほんとうの人生に足を踏み入れることができる」「(この眼をきたえるのだ) 呪文に似たことばで、自分に言いかせる」

「囚人の斧」という気を持たせる題名が、小説の筋立てに、あまり関係してこないのが不思議です。

《4. ストーリー 結末は?》

孫文が、呉邸の南むきの部屋で、安楽椅子に背を預けて海を眺め、呉錦堂が、孫文を囲んだ集合写真の準備に気を配っている頃、



舞子浜 根上がり松の林

『兵庫県立舞子公園百年史』

呉邸に続く松林の中では、孫文をねらう曹永忠が、拳銃で狙いやすい場所、自身の動作を確認していました。ぶらりと散歩に出た呉育雲は、根上がり松の林のなかで、そんな曹永忠と出くわし格闘となります。さて、結末は？

そんなできごとに気付くことなく、呉邸の玄関前で撮られたのが本号第1面の集合写真です。



小東野の製材所 大きな柱の右寄りに丸鋸が見えます
写真は1910年撮影 藤井昭三氏所蔵

『囚人の斧』 描かれた孫文と呉錦堂 心の距離

《5. 描かれた孫文と呉錦堂 心の距離》

物語のハイライト、舞子の呉邸での孫文と呉錦堂のやりとりです。

引用します。文中、鈴木久は鈴木久五郎。

呉錦堂の邸の南むきの部屋で、孫文は安楽椅子に背を預けて、海をみていた。「東京で鈴木氏にお会いになったそうですね？」と、呉錦堂は思わずおすとたずねた。「会いました」と、孫文は答えた。「奥さんがまもなくお目出度なので、私の名前の一字をほしいと言われましたね。文という字ですよ。もちろんよろこんで承知しました」鈴木久は孫文の亡命時代、革命資金に十万円を寄付していた。いまはおちぶれているが、国賓の孫文に会っても、生まれてくる子ども名前のほかは、なにも要求しなかったのがある。

「そうですか。……」
呉錦堂は、裏長屋に住んでいるという、かつての仇敵のみじめなありさまを、孫文の口からきこうと思っていたのだ。目が合った。孫文はほほえんでいた。しかし呉錦堂は、その眼に心の底まで射抜かれたような気がした。「しばらくお休みになってから、玄關のところで写真をとりました」と、そばから随員の一人が言った。「写真。……ああ、それはいいですね」孫文は呉錦堂をかえりみて、呷くように言った。(あなたとの関係は、写真にでもとっておかないと、なにも残らない) 呉錦堂は孫文の呷きのなかに、そんなことを大きく思いがした。彼は自分が孫文のまえで、みるみる縮んで、小さくなって行くようにかんじた。 ※文中、傍線は編集委員

下種の勘繰りと言われそうですが、そう受け取れる箇所は、『囚人の斧』の中、いくつもあります。

■「(呉錦堂は鼻ですべてを嗅ぎわける。そして、すぐに行動に移すのだ) 呉育雲はそう思った。呉錦堂の貧相な顔のなかで、鼻だけはりっぱであった」

■「(呉錦堂が孫文に誼みを通じていたのは、かならずしも時勢を見抜いていたからではない。財産に保険をかけるような意味だったのであろう。なにも感心することはない)」

このような記述は、小説の中だけでなく随筆の中にもあります。次にあげるのは、『神戸ものがたり』「二つの海」での呉錦堂描写です。

■「日本に渡ってくるまで、彼が国でなにをしていたか、じつはよくわからない。どうせ生活苦にあえぐ貧乏青年であったろうが、彼自身も国にいたころの話はあまりしたがらなかった。たのしい思い出などなかったのにちがいない。だから、彼の前身については、いろんな伝説がある。ひどいものになると、国で船頭をしていたとき人を殺したので、日本に逃げてきたという説もある。成功者は他人から嫉妬されるので、そんな話をつくられたのであろう」

市井人のおしゃべりではないのです。「という説もある」とは断っても、既に高名な作家の文章として世に出るのです。呉錦堂の縁者でなくても、異議を申し立てたくもなりません。

《6. 呉錦堂の孫文支援 『囚人の斧』を離れて》

ところで、呉錦堂と孫文の出会いを証拠づける資料といえば、本号1頁にあげた松海別荘前での集合写真ほか、この来神時に撮影した数葉の写真しか思い浮かびません。

このあと、孫文は第二革命に敗れ、1913年8月、日本へ亡命します。「夜陰に乗じて」神戸に上陸し、一週間、諏訪山温泉に潜居したという出来事は、よく語られます。この時、孫文を援けた神戸人士として、松方幸次郎、三上豊夷らの名があがりますが、春には孫文を別荘にまで招き歓迎した呉錦堂はどうしていたのでしょうか。また、「大アジア主義」講演で有名な1924年11月の孫文来神時も、孫文を訪問した関係人士的なかに呉錦堂の名はありません。

孫文の第二革命失敗以降、呉錦堂の孫文支援活動は、表面的には回避し、華僑社会の後進、若い指導者楊寿彭を通じて行われていたとも言われていますがどうだったのでしょうか。

引用文中傍線の箇所、なんとも厳しい言葉です。

本号の《1. はじめに》でも記しましたが、陳舜臣さんは、『囚人の斧』「あとがき」で、「事実には密着していません。本筋においてフィクションです。モデルに対する興味で読まれるのは、作者の本意とするところではありません」と書いています。

これは、ご自身、「ちょっと書きすぎたかな」という思いがあつての言い訳のように受け取れます。陳さんといえば、謙虚、温厚、人の悪口は言わない大人(たいじん)です。そんな陳舜臣さんにしては不思議です。そしてこれは、呉錦堂と孫文の心の距離というより、陳舜臣さんとの心の距離と思えます。



陳舜臣さんの妹、妙玲さんのこと

1972年、初めての中国旅行のとき、陳舜臣さんは北京で、「1950年代に祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、北京放送で放送記者をしていた妹の妙齡」（『陳舜臣中国ライブラリー30年譜』）さんに会っていますが、妹さんは、どういう経緯で中国に渡られたのでしょうか。このことについて、本田善彦著『中国首脳通訳がみた外交秘録 日・中・台 視えざる絆』（2006 日本経済新聞社）でみていきます。以下、本田善彦氏の同書は『視えざる絆』と略します。なお、妹さんのお名前は、ご親族に確認したところ、「妙玲」との返事をいただきました。但し、著書からの引用については、原文の表記に従います。（編集委員 橘雄三）

『視えざる絆』は、周恩来の通訳だった林麗韞（リン レイオン）ほか、複数の人々へのインタビューに基づき、日中関係、日華（日台）関係を描いた本ですが、ここで、この本を取り上げるのは、ただ、主たるインタビューー林麗韞さんの語る、陳妙玲さんのことにふれたかったからです。

「帰国」を果たした林麗韞さんは大学への進学を希望します。やがて、志望校（北京大学）受験が認められ、広東から上京します。

林さんが述懐する1952年当時の新中国は、初々しさと清々しさに満ちあふれていました。

「当時、街には活気があり、皆とても親切でしたよ。生まれ変わった社会が勃興するときの空気とでもいうのでしょうか、平等な人間関係、人民が主人になるという喜びを、至るところで感じましたね」

林麗韞さんが廖承志に「通訳の手伝い」を頼まれた1953年は、日本赤十字社と中国紅十字会の協議を経て、日本人居留民帰国問題に関する共同コミュニケ「北京協定」が発表されたことにもない、台湾人を含む在日華僑の中国への集団渡航が再開された

年です。彼女は廖承志に求められるまま天津に向かい、帰国する華僑を対象とした通訳に従事するようになります。配属されたのは中央人民政府華僑事務委員会（中僑委）の華僑接待施設でした。

下の枠内は林麗韞さんの語りです。



神戸時代の林麗韞（前列、向かって右）と、同左、陳妙玲
画像は『視えざる絆』から転載

「五三年の夏あたりから、日本との往来が次第に頻繁となり、多くの華僑が続々と帰国してきました」
通訳をしていた林麗韞さんが天津で迎えた初めての帰国船に、彼女の姉と、神戸時代の幼なじみ、陳妙玲さんが乗っていたのです。

「夏休みが終わり、私が大学に帰ることになったので、姉と妙令が私の後釜の通訳に選ばれました。妙令はのちに撫順の戦犯管理所に配属されました。当時、そこでは日本語のわかる人材が必要だったので、全国の各機関から多くの人々が選ばれ、裁判や戦犯への管理や教育を担当していたそうです。そこでの仕事が終わった後、北京に来て日本向け放送の仕事に従事するようになりました」

陳妙玲さんは北京放送で、日本の聴取者から寄せられる手紙を処理し、返信する業務を受け持つようになります。

「妙令はあのころ、城壁の外にあった中央人民広播電台（中央人民放送局）の近くの宿舎に住んでいましたね。当時、北京の城壁の外に出ると、薄暗くて明かりもなにもない畑が広がっていたんです。（中略）いちど妙令が結婚するというので、迷子になりながらいろいろの人に道を聞いて、婚礼のパーティーに参加したことがあります。（中略）お兄さんの陳舜臣さんが中国に来られると、妙令は決まって声をかけてくれました」

その陳妙玲さんが亡くなります。

「まだまだ若かったのに、数年前に北京市内で亡くなりました」

しんみりと話す林麗韞さんの声からは、いつもの快活さが消えていました。

